

昭和初期の母子保健をめぐる展覧会 三田谷治療教育院の実践を通して

駒松仁子

国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1
komamatsuh@adm.ncn.ac.jp

The Exhibition of Mother and Child Health in the Early Showa-Era ; Through Practice of Sandaya Sanatorium

Hitoko Komamatsu*

*National College of Nursing, Japan ; 1-2-1 Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan

【Abstract】 Purpose : To help promote mother-child health today by looking in detail at exhibitions on maternal education and child-rearing advice, given by the Sandaya Sanatorium in the early Showa period. **Results :** There were 117 exhibits from the period from 1928 to 1939. After analyzing the exhibits, this period was divided into two. The first period was from 1928-1932 and concentrated on educating mothers as much as possible. Most of the exhibits were displayed by the Mother's Association, and others were displayed by municipal neighborhood associations and women's clubs. Most of the exhibitions were held in department stores in the Kyoto-Osaka-Kobe area and in the Chugoku-Shikoku area. The second period was from 1933-1939 and concentrated on child-rearing and maternal love. The exhibitions in this period were sponsored mainly by Patriotic Women's Clubs and the Mother's Association, in that order. These were held mainly in department stores, but some were held in elementary schools. The exhibitions were held in both the Toukai-Hokuriku region and in the Kyushu, in addition to the Kyoto-Osaka-Kobe area and the Chugoku-Shikoku region. **Discussion :** Problems of child health became obvious in the early Showa period and were included as part of the health policy. The Sandaya Sanatorium fulfilled the role of spokesperson, providing scientific knowledge and the latest information to mothers and children. The information offered in the exhibitions on educating mothers and on child-rearing has something to offer, even today. Hints for solutions to problems surrounding child-rearing today can be found in these exhibitions.

In order to make healthy child-rearing possible, it is essential to educate women and men on how to become good mothers and fathers. It is also important to educate young men and women before they become parents, to prepare them for their roles.

【Keywords】 母子保健 mother and child health, 展覧会 exhibition, 三田谷治療教育院 Sandaya Sanatorium, 昭和初期 early Showa-era

1. はじめに

今日、母親の育児不安の増大、親による児童虐待など、母子をめぐる様々な問題や思春期の心の問題が顕在化している。さらに医学の進歩により小児難治性疾患のキャリアオーバーした患者の増加、胎児医療など周産期医療の進歩のもとに、従来の小児医療のみでは対応できない状態にある。このような社会的背景のもとに、2002(平成14)年3月、国立成育医療センター^{註1)}が発足した。柳沢²⁾は成育医療の課題の一つとして「子どもの心の危機、乳幼児・学童の行動・発達の問題、思春期の心身の健康、ハイリスクの家族の抱える問題に対して、従来の診療枠を超えた連携・協同を可能とする成育医療の積極的なかわりが求められて

いる」と述べている。

戦前においても子育てや子どもの心身をめぐる問題があり、それへの対応がなされていた。そのひとつに、現在、知的障害児・者施設である社会福祉法人三田谷治療教育院を1927(昭和2)年に設立した、医師の三田谷啓の活動がある。三田谷治療教育院は病院と学校と家庭を一緒にした施

註1) 国立成育医療センターは高度先駆的医療を担うナショナルセンターとして、わが国最初の国立小児病院と国立大蔵病院との統合のもとに平成14年3月に開設された。「成育医療」の概念は「ライフサイクルとして捉えた医療体系、すなわち受精から出発して胎児、新生児、乳児、学童、思春期を経て生殖世代となって次の世代を産み出すというライフサイクルにおける心身の病態を包括的・継続的に診る医療」である(柳沢正義：成育医療の概念とその背景、小児看護、25(12)、1567-1570、2002.)

表 1 展覧会のテーマおよび年次開別催数

時期区分 年次 展覧会のテーマ	I 期：母性教育を中心とした啓蒙活動期				
	1928 年 昭和 3 年	1929 年 昭和 4 年	1930 年 昭和 5 年	1931 年 昭和 6 年	1932 年 昭和 7 年
コドモをよくするために 母のための展覧会	0	0	0	0	0
母のため子のための展覧会	0	5	8	0	1
異常児童に関する展覧会	0	0	0	4	6
コドモを強く賢くするために 輝く母性愛展覧会	10	2	0	0	0
子のための展覧会	0	0	0	0	0
女性のための展覧会	0	0	0	6	0
若人のための展覧会	0	0	0	0	6
体位向上展	0	0	0	0	0
計	10	7	8	10	13

I 期(1928～1932 年)：母性教育を中心とした啓蒙活動期

II 期(1933～1939 年)：子育てと母性愛を中心とした啓蒙活動期

設であった。三田谷啓は「精神薄弱」児、身体虚弱児、性格や行動に問題がある子どもなどを入園させ、‘治療教育’を実施した²⁾。さらに、児童教養相談や母性教育や育児啓蒙を目的とした講習会や展覧会などを実践した³⁾。

展覧会の先行研究として、田中⁴⁾の『衛生展覧会の欲望』ある。「衛生展覧会」^{註2)}は「啓蒙的催しであるのみならず見世物」⁵⁾でもあり、「衛生思想が不可視の制度として内面化しつつあった過渡期にあつてこそ、大衆社会の<視線-身体>を形成する装置として有効であった」⁶⁾。田中の研究においては、三田谷治療教育院が実践した展覧会については言及していない。

本報告の目的は、昭和初期の三田谷治療教育院が実践した展覧会の内容をつまびらかにして、現在の育児支援や母性教育に役立てることである。

II. 対象と方法

対象：三田谷治療教育院所蔵の史・資料および「展覧会に関する記録」

方法：文献研究

分析の視点：展覧会のテーマを時系列に整理し、陳列項目、主催者、開催場所、開催地域の視点から分析し、時期区分を行い各期の展覧会について検討した。

資料および原文の引用に関しては原文通りとする。現在使用されていない言葉でも、歴史的用語としてそのまま表

註2) 「衛生展覧会」は、「衛生に関するさまざまな展示を行い、病気の知識や人体の構造、日ごろの衛生的心得などについて見学者に教えようとする啓蒙的な催し」である。(田中聡：衛生展覧会の欲望，7頁，青弓社，1994)

記する。なお、旧漢字体は新漢字体とした。

III. 結果

1. 展覧会のテーマ別開催状況

展覧会は1928(昭和3)～1939(昭和14)年の期間に117件開催されていた。

テーマで最も多かったのは「子どもを善くするために」が22件(19%)、次いで「母のための展覧会」「母のため子のための展覧会」が各14件(12%)であった(表1)。展覧会的主催者で最も多かったのは「愛国婦人会」^{註3)}の44件(29%)、次いで「母の会」^{註4)}が36件(23%)であった(表2)。開催場所は百貨店が54件(46%)、小学校が18件(15%)、会館・公会堂が14件(12%)、女学校が13件(11%)の順に多かった(表3)。開催地域は兵庫県が23件(20%)で最も多く、次いで大阪が20件(17%)であった。開催件数は少ないが北海道、東北を除いた各地で開催されていた(表4)。

展覧会の資料は三田谷治療教育院が収集および作製した

註3) 「愛国婦人会」は1901(明治34)年、戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問を目的として、奥村百合子を中心となり、皇族・華族など上流夫人を会員として創立した婦人団体である(<http://www.cnet-ta.ne.jp/p/pddlib/photo/chiyoda/fujinkai.htm>より)。1921(大正10)年、愛国婦人会内に児童健康相談所が開設され、乳幼児の健康相談を実施した。その後、各地方支部にも開設された(武崎宗三：愛国婦人会児童健康相談概況，社会事業，6(1)，64-69，1922)。

註4) 「母の会」は三田谷啓が昭和4年に三田谷治療教育院内に設立した「日本母の会」の会員により全国各地に発足した会であり、地域において活動を行った。

II期：子育ておよび母性愛を中心とした啓蒙活動期							
1933年 昭和8年	1934年 昭和9年	1935年 昭和10年	1936年 昭和11年	1937年 昭和12年	1938年 昭和13年	1939年 昭和14年	計
5	11	5	0	1	0	0	22
0	0	0	0	0	0	0	14
3	1	0	0	0	0	0	14
0	0	0	0	0	0	0	12
0	2	2	5	2	0	1	12
0	0	0	0	8	3	0	11
3	0	0	1	0	0	0	10
3	0	1	0	0	0	0	10
0	0	1	5	1	0	0	7
0	0	0	0	0	1	4	5
14	14	9	11	12	4	5	117

単位：件

(三田谷治療教育院所蔵「展覧会に関する記録」より作成)

表2 展覧会主催者 (延べ数)

主催者	I期	II期	計
愛国婦人会	0	44	44
母の会	20	16	36
自治体(県・市)	13	4	17
婦人会	10	5	15
小学校	3	7	10
高等女学校	6	1	7
日本児童学会	5	2	7
新聞社	5	2	7
三田谷治療教育院	2	1	3
コドモ研究会	2	1	3
その他	3	2	5
計	69	85	154

単位：件

(三田谷治療教育院所蔵「展覧会に関する記録」より作成)

表3 展覧会開催場所

開催場所	I期	II期	計
百貨店	17	37	54
小学校	9	9	18
会館・公会堂	5	9	14
女学校	9	4	13
物産陳列所	2	3	5
新聞社	2	1	3
三田谷治療教育院	2	1	3
県会議事堂	1	1	2
その他	1	4	5
計	48	69	117

単位：件

(三田谷治療教育院所蔵「展覧会に関する記録」より作成)

ものであった。ジオラマ^{註5)}、臓器模型および出品の際の実物は、大丸百貨店(京阪神)、白木屋百貨店(東京)、松阪屋百貨店(東京および大阪)等の援助によって作製した。開催地域の医科大学の協力により胎児標本や耳鼻咽喉内異物などが陳列された場合もあった³⁾。

各地における展覧会開催に際しては、三田谷治療教育院の三田谷啓院長や的場循治書記等が出張していた。展覧会開催中は三田谷啓等が児童相談や講演を行った。

註5) ジオラマとは、長い布に描いた背景の前に物を置いて照明し、実際の光景を見るような錯覚をおこさせる見世物である。(広辞苑より)

2. 時期区分

展覧会のテーマに基づいて時系列に整理し分析した結果、次の2期に時期区分できた。すなわちI期<1928(昭和3)~1932(昭和7)年>：母性教育を中心とした啓蒙活動の時期、II期<1933(昭和8)~1939(昭和14)年>：子育てと母性愛を中心とした啓蒙活動の時期、であった。次に各期の展覧会の状況について述べる。

I期：母性教育を中心とした啓蒙活動の時期(表5)

I期は48件の展覧会が開催された。最も多かったテーマは「母性に関すること」で30件(63%)、その内訳は『母のための展覧会』が14件、『母のため子のための展覧会』が10件、『子のための展覧会』が6件であった。次いで「異常

表 4 展覧会開催地域

開催県	I 期	II 期	計
兵庫	10	13	23
大阪	12	8	20
京都	4	3	7
岡山	2	5	7
広島	3	4	7
東京	3	3	6
愛媛	0	4	4
香川	3	1	4
滋賀	3	1	4
愛知	2	1	3
福岡	0	3	3
佐賀	0	3	3
福井	1	2	3
奈良	1	2	3
島根	2	1	3
和歌山	1	2	3
静岡	0	2	2
長崎	0	2	2
鳥取	0	2	2
石川	0	2	2
岐阜	1	0	1
山梨	0	1	1
富山	0	1	1
三重	0	1	1
山口	0	1	1
熊本	0	1	1
計	48	69	117

単位：件

(三田谷治療教育院所蔵「展覧会に関する記録」より作成)

児童に関する展覧会」が 12 件、「女性のための展覧会」が 6 件であった(表 1)。

主催者で最も多かったのは「母の会」が 20 件(29%)、次いで「地方自治体(県・市)」が 13 件(19%)、「婦人会」が 10 件(14%)、「学校」^{註 6)}が 9 件(13%)で内訳は『高等女学校』が 6 件、『小学校』が 3 件であった(表 2)。「母の会」や学校が主催した場合、文部省社会教育局、開催県・市の学務課や社会教育課が後援者であった。開催場所で最も多かったのは百貨店(大丸、松阪屋、白木屋など)が 17 件(35%)で、次いで小学校が 9 件、高等女学校が 9 件であった(表 3)。開催地域は京阪神を中心に東京、中国・四国地方に及んでいた(表 4)。

次にこの時期に開催された各テーマの初回展覧会を中心に紹介をする。

註 6) 高等女学校の場合は同窓会などで開催し、小学校の場合は父兄会や学芸会に合わせて開催していた。

「異常児童に関する展覧会」は三田谷治療教育院で最初に開催された展覧会であった。三田谷治療教育院相談所の落成記念として、昭和 3 年 3 月 30～4 月 4 日、三田谷治療教育院の主催で開催された。毎日数百名の参観者があり、開催日を 1 日延期したほどの盛況であった。「異常児童に関する展覧会」の趣意はリーフレット^{註 7)}に次のように述べられている。

異常児童に関する教養は特殊の用意と注意を要するに拘らず動もすれば不合理に取扱われています。これはコドモ自身は申すまでもなく家庭のために大きな不幸でもあります。そこで異常児童の概念を示しその状態を明にし進んでその取扱法を解説する目的で展覧会を開くことになりました。実際上の参考となることが出来ればまことに結構であります。

陳列項目は「異常児童」の概念、身体の機能およびその「異常」、精神およびその「異常」(言語障害、強迫観念、頭痛、痙攣、チック、ヒステリー性格、暴行、夜驚、盗癖など)「異常児童」の治療(治療教育、精神療法など)、社会的児童保護、個性調査などであった。

「母のための展覧会」は三田谷治療教育院の児童宿舎増築の落成披露に併せて、昭和 4 年 6 月 21～24 日、三田谷治療教育院の主催で開催し、新しく調製した母性教育の資料が陳列された。「母のための展覧会」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

母という専門家ほどその専門の知識に乏しいものはないと謂われて居ます。これは母になる準備が不十分であったのと、母としての修養を怠ったためでせう。あらゆる母が母の責任、義務を感じ母としての資格を得ることの如何に重大なるかを意識してコドモの教養にそれを実現し、家庭、社会、国家の安寧と幸福とを期するようになりたいと思います。今回母のための展覧会を開くことになったのはこの目的の幾分を達したためであります。

陳列項目は結婚、妊娠、出産、母性教育、母を描いた世界の名画、新旧女性の読み物などであった。初日は大阪朝日新聞神戸支局主催の展覧会見学団(120 名)の来観があった。期間中、甲陽母の会、大阪母の会、関西婦人連合会、神戸松蔭高等女学校、神戸女学院生などの団体や一般の来観が、毎日、500 名から 800 名に達していた。

昭和 4 年 12 月 15～22 日にも「母のための展覧会」が、京都母心会主催、京都市教育課・大阪朝日新聞社京都支局後援により、京都大丸で開催されたが、会場として大丸催場

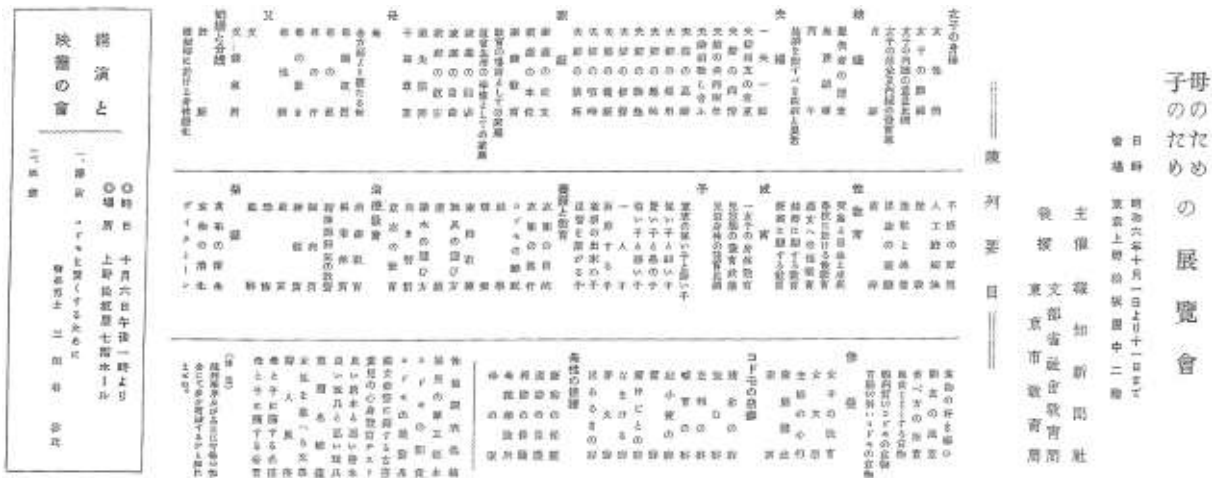
註 7) 各展覧会のリーフレットはすべて三田谷治療教育院所蔵である。

表 5 Ⅰ期：母性教育を中心とした啓蒙活動期の展覧会

展覧会名	異常児童に関する展覧会	母のための展覧会	子のための展覧会	母のため子のための展覧会	女性のための展覧会
開催月日	昭和3年3月30日～4月4日	昭和4年6月21～24日	昭和6年2月1～6日	昭和6年10月1～11日	昭和7年2月23～28日
主催	三田谷治療教育院	三田谷治療教育院	京都母心会	報知新聞社	日本児童学会 大阪母の会 大阪翠会
後援			文部省社会教育局 京都市社会教育課	文部省社会教育局 東京市教育局	文部省社会教育局 大阪府学務課
開催場所	三田谷治療教育院	三田谷治療教育院	京都大丸七階催場	東京松坂屋中二階	大阪大丸五階(新館)
趣意	「異常」児童の状態を明らかにして、その取り扱いについて解説する。	母の責任と義務を感じ、母としての資格を得ることの重大性を意識して子どもの教養に実現する。	子の教育に全力を注ぐことは親としての務めである。親のために子女教育の参考資料を提供。		文化の進歩につれて女性生活が向上し、充実する必要がある。そのことに資することを目的とする。
陳列項目	<p>総論 異常児童 身体と機能及びその異常 変性兆候 貧血 脊椎湾曲 扁桃腺 斜頸 頭顱指数 脳水腫 月経異常 色盲 諸種の奇形 精神及び其の異常 乳児の精神発育 教育病理学 精神薄弱児童 精神薄弱児童の年齢的分類 知能率とその割合 知能測定法 知能率と人口百人中の割合 言語障害 聾啞 脅迫観念 錯覚 幻覚 夢小児の精神に異常を起こす原因 舞蹈病 頭痛 痙攣 チック 睡眠異常 精神薄弱児教養法 魯鈍児の教養 白癡の教養 精神低格児童 精神低格児童の教養 一人子 落第 罰 ヒステリー 性性格 放火癖 虚言 恐怖 彷徨 性欲異常 夜驚 盜癖 不良少年 治療及び保護 治療教育学 精神療法 近視予防 吃音の治療法 林間学校 社会的児童保護 雑 言語障害調査法 個性表</p>	<p>第一部 結婚 第二部 妊娠 第三部 出産 第四部 疾病 第五部 生殖 第六部 母性教育 第七部 母と子に関する縁起玩具 第八部 台所に関するもの 第九部 コドモの菓子 第十部 内外婦人鑑 第十一部 母と子に関する各国格言 第十二部 玩具 第十三部 コドモの性能調査 第十四部 コドモの読み物 第十五部 新旧女性の読み物 第十六部 母を画ける世界の名画</p>	<p>第一部 夫婦 第二部 家庭 第三部 父と母 第四部 結婚 第五部 妊娠と出産 第六部 性教育 第七部 成育 第八部 子 第九部 養護と教育 第十部 食物 第十一部 衛生 第十二部 修養 第十三部 コドモの悪癖 第十四部 玩具 第十五部 絵本 第十六部 遊戯 第十七部 動物愛 第十八部 体力測定(実験) 第十九部 性能検査(実験)</p>	<p>女子の身体 第一部 結婚 第二部 夫婦 第三部 家庭 第四部 母 第五部 父 第六部 妊娠と分娩 第七部 性教育 第八部 成育 第九部 子 第十部 養護と教育 第十一部 治療教育 第十二部 栄養 第十三部 修養 第十四部 コドモの悪癖 第十五部 母性の保護</p>	<p>第一部 女性の身体 第二部 年零期より観たる女性 第三部 月経 第四部 結婚 第五部 妊娠 第六部 出産及び産褥 第七部 性教育 第八部 女性の心理 第九部 女性と体育 第十部 コドモの教養 第十一部 女性と家庭 第十二部 服装と美装 第十三部 家庭衛生 第十四部 食物 第十五部 女性と趣味 第十六部 女子発育 第十七部 女性と職業 第十八部 女性と社会 第十九部 各方面より観たる女性 第二十部 女性の行くべき道 第二十一部 女性と疾病 第二十二部 女性と修養</p>
備考	<p>参考： 一、各国に於ける異常児童保護施設 一、書籍 一、機器 一、標本、模型</p>		<p>出品：三田谷治療教育院</p>	<p>講演と映画の会 日時：10月6日 午後1時より 場所：東京上野松坂屋 講演：コドモを賢くするために 医学博士 三田谷啓 映画：</p>	<p>出品：三田谷治療教育院</p>

(三田谷治療教育院所蔵の各展覧会のリーフレットより作成)

資料1(三田谷治療教育院所蔵)



全部を使用した。この際には、京都府立医科大学より胎児標本、耳鼻咽喉内異物標本が出品された。期間中、会場において2日間は三田谷院長の児童相談が実施された。毎日、3~4万人の入場者があり、最終日は9万人で、期間中の入場者集計は395,000人であった。

続いて「子のための展覧会」「母のため子のための展覧会」と題する展覧会が開催されたが、陳列項目はいずれも母性に関する知識の普及を目指した内容が主なるものであった。

「子のための展覧会」の初回は昭和6年2月1~6日、京都母心会主催、文部省社会局・京都市社会教育課後援により、京都大丸で開催された。「子のための展覧会」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

古から「千の庫より子は宝」と申しますやうに、凡そ人生子に優る宝はありませぬ。その何ものにも代へ難き子の教育に全力をそぐことは、親として当然の務めでありませぬ。

この当然の務めが十分にできないため思わぬ禍が起るのであります。

『子のための展覧会』は、親のために子女教養の参考資料を提供する目的で開かれるのであります。

陳列項目は夫婦、家庭、父と母、結婚、妊娠と出産、成育、養護と教育、玩具、絵本などであった。体力測定、性能検査の実験もあった。期間中の入場者数はつまびらかでないが盛会であった。この展覧会は同月のうちに神戸大丸(神戸母の会主催)、大阪大丸(大阪母の会・大阪翠会主催)でも開催され、いずれも盛会であった。

「母のため子のための展覧会」の初回は昭和6年10月1~11日、報知新聞主催、文部省社会局・東京市教育局後援により東京上野松坂屋で開催された。会場において展覧

会の内容を集めた小冊子『母のため・子のため』^{註8)}が頒布された。その緒言には次のように述べられている。

明治大帝の御製

国のために力つくさむわらはべを

教ふる道にこころたゆむな

教育をおろそかにしてはならぬと言う大御心がよく伺われる。日本の全国民がこのみこころを拝戴して真剣に児童の教育を行ったら、日本は世界一の国になれる筈である。

子を教える母がその道を辨へず、身を以って子を導く決心が少ないから子を傷うことになるのである。

母は人類の創造者である。母はこの資格を備えるために準備をなし修養を積まなければならない。

賢い母、強い母、善い母によって初めてコドモを賢くし、善良に導くことができるのである。かくてよき世界が創造されるのである。

この編『母のため子のため』は以上の理由によって編まれたものである。子を持つ母のための参考となれば幸いである。

「母のため子のための展覧会」の陳列項目は「母のための展覧会」と「子のための展覧会」を合わせた内容であった(資料1参照)。展示された性能調査器機、各種伝染病模型、妊娠10か月胎児模型は山越工作所の出品であった。会場内は電気点滅装置による乳幼児の発育テスト及び父母の愛に関する装飾が設備されていた。「母のため子のための展覧会」は、伊丹高等女学校や奈良育英女学校同窓会の主催、さらには滋賀県長濱高等女学校では創立記念として同校主

註8) この冊子は三田谷啓が編集、大日本雄弁会講談社より昭和9年9月25日に発行されていた。

表 6 II期：子育てと母性愛を中心とした啓蒙活動期の展覧会

展覧会名	子どもをよくするための展覧会	子どもを強く賢くするための展覧会	若人のための展覧会 (年ごろの子女展)	輝く母性愛展覧会	体位向上展
開催月日	昭和8年2月14～19日	昭和9年8月16～19日	昭和10年11月19～22日	昭和12年1月10～17日	昭和13年10月20～23日
主催	日本児童学会 大阪母の会 阪南母の会 大阪翠の会	京都母の会	京都母の会	大阪母の会	愛国婦人会大阪支部
後援	文部省社会局 大阪府学務部	大阪朝日新聞社京都支局	大阪朝日新聞社京都支局		大阪府 大阪市
開催場所	大阪大丸五階催場	京都大丸七階催場	京都大丸	大阪松阪屋	大阪松阪屋
趣意	子どもをよくすることは人類共同の務めである。子どもをよくする事の大綱を示すことを企てた。	すでに開催した展覧会の発育に関する資料に、知育・体育に関する資料を追加し児童教養の参考に供するため。	若人の行くべき正しき道を示し、他方には、その親たちに警告をする。	母性愛という尊い問題をすべての人々と共に深く深く味わうため。	体力向上の問題は国民全体が真剣に努力すべき問題である。知識と努力とを正しい道に應用して、目的が達成される。
陳列項目	よい家庭生活 よい育て方 よい教え方 よい躰け方 よい手本 こんな場合はどうすればよいか 社会生活 人類の恩人 訓への言葉 親心子供心の詩歌 人生警句	第一部 総論の部 遺伝 強い子を産むための準備 賢い子を産むための準備 子どもを強く育てる法 肺を強くするために 子どもを賢く育てる法 身体と知能 日光浴と人工太陽燈 其他 第二部 乳児の部 乳児の発達 各月における乳児の心身発育 乳児の栄養品 乳児を強く育てる法 乳児の躰け方 乳児の運動 其他 第三部 幼児の部 幼児の心身発育 幼児の精神 幼児を強くするために 幼児を賢くするために 幼児の遊戯 幼児の絵本、幼児の玩具 童話 幼児の教育 小学校へ入る準備 第四部 学童の部 学童と運動 肺を強くする法	身体 結婚 青年期 勤勉努力 修徳 職業 立志 学校における運動体育の免除 運動実施上の注意 腺病質の子ども 胃腸の弱い子ども ひとり子 食欲の乏しい子 教授の衛生 試験時の衛生 記憶を強くする法 「精神薄弱」児の教育 算術をよく出来るようにする法 秀才児の教育	子を善くした母性愛 この陰にこの母性愛あり 子の悪癖をなおした母性愛 上手に躰る母性愛 母性の修養 科学を重んじる母性愛 母性の修養 偉人の母 当世母親気質 母性愛を主題とする詩歌 動物の母性愛 実物 麗しきジオラマ八十場面	時局と体位向上への進展 非常時下における食物 体力とその測定 国民体力の増進 時局下における勤労衛生 国策順応への衣服改善 非常下における国民衛生 日光の恩恵と活用 我が国女子の体位向上 各国の体位向上運動 国民の寿命を長くする道 其他 ジオラマ数十種及び実物
備考	出品：三田谷治療教育院 講演会 日時：2月14日、17日 午後1時より 場所：大丸三階会議室 講師：医学博士 三田谷啓 母親相談：15～17日 三田谷啓 池田金次郎	出品：三田谷治療教育院 其他の資料として諸種の飾り付け、実物、模型等がある。		出品：三田谷治療教育院	出品：三田谷治療教育院

(三田谷治療教育院所蔵の各展覧会のリーフレットより作成)

資料2(三田谷治療教育院所蔵)

奉祝 皇太子殿下御誕生

コドモをよくするための展覧會

日本橋白木屋
會期
三月十一日よ
り二十日まで
(但し十八日は百貨店の
生谷日につき休業)
入場無料

コドモをよくすることは人類生活の根本義で、人類共同の務めであり、この仕事に失敗することは人類の滅亡です。これ程大切な問題が往々忘れられたり、誤った方法で実行されたりして居ることは、ことに遺憾に存じます。そこでコドモをよくすることの大綱を示すことを企てたのがこの展覧會であります。

講 演
三月十二日 子供をよくするために
講師 醫學博士 三田谷啓 氏
三月十三日 子供の體について母の知るべきこと
講師 醫學博士 竹内茂代女史
●聴き逃してはならぬ講演會
子供第一 其他

日本橋白木屋ホールに於て 午後一時より
三月十二日 子供をよくするために
講師 醫學博士 三田谷啓 氏
三月十三日 子供の體について母の知るべきこと
講師 醫學博士 竹内茂代女史
●聴き逃してはならぬ講演會
子供第一 其他

座談會
子供を養ふための座談會
三月十二日午後七時三十分より八時三十分まで
中央放送局より全編へ中継放送いたしますから成るべく御聴取願ひます
出席者
三田谷啓 醫學博士 三田谷啓 醫學博士
東京女子醫學院教授 醫學博士 三田谷啓 醫學博士
愛国婦人會幹事 文筆士 三田谷啓 醫學博士
田子 静江氏 三田谷啓 醫學博士
三田谷啓 醫學博士 三田谷啓 醫學博士
三田谷啓 醫學博士 三田谷啓 醫學博士

三田谷治療教育院
愛国婦人會
主催

催で開催された。

「女性のための展覧會」の初回は、昭和7年2月23～28日、日本児童学会・大阪母の会・大阪翠会が主催して、大阪大丸で開催された。「女性のための展覧會」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

文化の進歩につれて女性生活が向上し充実することの必要あるは申すまでもありません。この意味で、聊か斯道のために資する目的で今回左記の順序にて『女性のための展覧會』を開催することになりました。何卒御來觀の程切に願ひ申し上げます。

陳列項目は女性の身体、結婚、妊娠、出産及び産褥、女性の心理、女性と職業、女性と社会などであった。

II期：子育てと母性愛を中心とした啓蒙活動の時期(表6)

II期は69件の展覧會が開催されていた。「子育てに関すること」が34件(49%)、内訳は『コドモをよくするための展覧會』が22件、『コドモを強く賢くするための展覧會』が12件、「母性愛に関すること」(輝く母性愛)が11件、「青年期に関すること」(若人のために)が7件、「体位向上」が5件、「女性のため」が4件であった(表1)。

主催者は愛国婦人會(本部・県支部)が44件(52%)、次いで「母の会」が16件(19%)であった(表2)。開催場所は、最も多かったのは百貨店の37件(54%)で、次いで小学校

や公会堂などであった(表3)。開催地域はI期の地域に加えて東海北陸、九州にまで及んでいた(表4)。

「コドモをよくするための展覧會」の初回は昭和8年2月14～19日、日本児童学会・大阪母の会・阪南母の会・大阪翠会の主催、文部省社会局・大阪府学務部後援で、大阪大丸で開催された。会期中、三田谷啓および医師の池田金次郎が会場で児童相談を実施した。「コドモをよくするための展覧會」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

コドモをよくすることは人類生活の根本義にして人類共同の務めであり、この仕事に失敗すると人類は滅亡です。これほど大切な問題が往々忘れられたり誤った方法を実行されたりして居ります。そこでコドモをよくすることの大綱を示すことを企てたのがこの展覧會です。何らかの参考になり得ましたら幸であります。

陳列項目はよい家庭生活、よい育て方、よいしつけ方、社会生活、人類の恩人、親心子供の詩歌などであった。その後、この展覧會は「奉祝 皇太子殿下誕生 コドモをよくするための展覧會」と題して、昭和9年3月11～20日、日本橋白木屋において、三田谷治療教育院と愛国婦人會の共催で盛大に開催された(資料2参照)。以後、愛国婦人會の県支部が各地で主催者となって、さまざまな展覧會が開催された。

「**コドモを強く賢くするため展覧会**」の初回は昭和9年8月16～19日、京都母の会主催、大阪朝日新聞社京都支局後援により、京都大丸で開催された。「コドモを強く賢くするため展覧会」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

智育・体育・徳育がコドモの教養の三大綱要であることは、今も昔も変わりませぬ。曩に「コドモをよくするための展覧会」を開き、徳育に関する資料を提供いたしました。今回新たに体育・智育の二方面の材料を集めて「コドモを強く賢くするため展覧会」として聊か児童教養上の参考に供したいと思ふのであります。幸に江湖の是正を希ふ次第です。

陳列項目は総論の部(強い子を産む準備、賢い子を産む準備、子どもを賢く育てる法など)、乳児の部(各月に於ける心身の発育、強く育てる法、躰け方など)、学童の部(学童と運動、学校における運動体育の免除、腺病質^{註9)}のコドモ、ひとり子、食欲の乏しい子、試験時の衛生、「精神薄弱」児の教育など)であった。この展覧会も愛国婦人会の県支部の主催で近畿、中国、九州の各地で開催された。

青年を対象とした展覧会の初回は「若人のための展覧会」と題して、昭和10年11月19～22日、京都母の会主催、大阪朝日新聞京都支局後援により、京都大丸で開催された。翌年、それは「年ごろの子女展覧」と改題して、昭和11年2月19～23日、神戸母の会主催、神戸市社会課・大阪朝日新聞社神戸支局後援により、神戸そごうで開催された。「年ごろの子女展覧」の趣旨はリーフレットに次のように述べられている。

米国ロッキー山上に二つの池がある。風の吹き廻しで、雨が甲の池に落ちたり、乙の池に飛ぶ。一方の池の水は東メキシコ湾に、他方は西の太平洋にそぐ。初め隣りあった池の水が、高さ三百軒の山を距てて、一萬何千軒といふ遠い距離へ分かれて行く。

青年期はロッキー山上に立って居ると同じだ。一方には成功の道があり、他方には墮落の谷がある。三田谷博士多年の蒐集による資料を以て、若人の行くべき正しき道を示し、他方には、その親たちに警告したいのが、この展覧会の本旨である。

万障を繰合せて御来観を乞う。

陳列項目は身体、運動、青年期、性教育、結婚、勤勉努

註9) 腺病質は浸出性リンパ体質に基づくものである。原因は栄養不良、栄養過剰、不良な住宅環境、光線・空気の不良などが原因である。腺病質は貧民階級のみならず、上流階級においてもみられる疾患である(三田谷啓：児童と腺病、帝国教育、405、33-37、1916.)。

力、修徳、性能と職業、立志であった。2月18日神戸医師会館において三田谷啓による「年ごろの子女を持つ親達へ」と題した講演が行われた。

「**輝く母性愛展覧会**」の初回は昭和12年1月10～17日、大阪母の会主催で大阪松坂屋にて開催された。「輝く母性愛展覧会」の趣意はリーフレットに次のように述べられている。

母!! これほど尊く、またなつかしく響く言葉は又とないでせう。母性愛は生の絶頂美の完成であります。苟も生きとし生けるものは何人も母の愛に感謝せぬものはありません。母性愛は慈愛です。意志です。力です。故に柔であっても強いのです。

母性愛は望みです。感激です。慰安です。信頼です。故に絶えざる温かさがあります。母性愛は創造です。犠牲です。この力は洪大無辺であります。

すべての母性は、この光栄を発揮し、常にその尊厳を保つべきであります。

「輝く母性愛展」を開きますのは、実にこの尊い問題をすべての人々と共に、深く深く味わいたいからであります。

何卒御来観の程をお待ち申し上げます。

陳列項目は、子を善くした母性愛、此の陰に母性愛あり、子の悪癖をなおした母性愛、上手に躰ける母性愛、偉人の母、母性保護などであった。続いて昭和12年2月16～20日、神戸母の会・日本児童学会主催、神戸市社会課後援により、大阪松坂屋で開催された。その後は愛国婦人会県支部の主催で中国、四国、九州の各県で開催された。

「**体位向上展**」の初回は昭和13年10月20～23日、愛国婦人会大阪支部主催、大阪府・大阪市後援により、大阪松坂屋において開催された。「体位向上展」の趣旨はリーフレットに次のように述べられている。

時局は深刻になり、ます／＼重大性を加えて行きます。一人一人の国民が、国家と云う大きな鎖の一つである以上、一人残らず、実行力のある人間にあらねばなりません。押し、引き挙げ、抑える力の持ち主になるのです。体位の向上は、国民全体が真剣の態度になって努力すべき重大問題です。一に力、二に力、三にも力です。知識と努力とを、正しい道に應用して、初めて目的が達せられるのです。

この趣旨によって、時局下の体位向上展を開きます。切に御来観を切望する次第であります。

陳列項目は時局と体位向上への進展、非常時下における食物、体力とその測定、国民体力の増強、非常時に於ける国民衛生、我が国女子の体位向上などであった。この展覧

会の主催はすべて愛国婦人会県支部であった。

IV. 考 察

明治期の終わりころから乳児死亡率は増加し、1918(大正7)年には最高値を示した。その後、乳児死亡率は減少傾向にあったが、青年男女の死亡率とともに欧米に比して著しく高かった。そして結核、身体虚弱、腺病質の子どもが多かった⁷⁾。昭和に入って小児の体位(身長・体重)は改善されていたが、胸囲が向上せず筋骨薄弱であることが問題となった。同時に結核が社会的にもクローズアップされた⁸⁾。さらに1920(大正9)年を頂点として出生率は減少傾向にあった⁹⁾。

このような社会状況のもとに健民政策として子どもの健康に関する対策が積極的に取り組まれるようになった。

昭和初期は世界大恐慌による日本経済への影響、昭和6年の満州事変など、わが国の内情は不安定な状態にあり、国内体制の整備が進められた¹⁰⁾。大恐慌により家庭が崩壊し、家族制度が危機に瀕していく状態において、文部省は「家庭教育施策に関する文部大臣訓令」を出し、家庭教育施策を開始した¹¹⁾。

村田¹²⁾は「1929年7月、文部省内に設置された社会教育局は、同年に強化総動員運動に着手した。そして、翌年30年から、同局は主婦、母の役割を負う成人の女性に対して観念としての家庭観の再編を求めていく試みとして婦人教育、婦人団体の組織化として家庭教育施策に取り組む。家庭が崩壊する状況のなかでそれをくいとめる施策が女性を担い手として始められるのである」と述べている。

時代の要請を鋭敏に感じとった三田谷啓は、母の会や愛国婦人会、地方自治体、百貨店などの賛同を得て、母性教育や子育てに関する啓蒙活動を実践したのである。文部省社会局や地方自治体の社会課が後援した展覧会も少なくなかったが、それも上記のような社会的背景によるものと思われる。

現在のようにマス・メディアが発達していなかった時代に、子育てや母性教育に関する啓蒙活動として視覚に訴える展覧会が果たした役割は大であったと思われる。三田谷治療教育院は子育てや健康に関する医学的知識、さらには最新の情報を提供する発信基地の役割を果たしていた。三田谷啓は子どもの健康問題について、常に心身両面からアプローチするとともに、母性愛や子育てに関する具体的な情報を提供していた。

白井¹³⁾は「母性とは、次世代の健全な育成のために女性に備わっている身体の形態的・機能的特性ならびに精神的・行動的特性を統合したもの」であると述べている。「母性愛」とは母親が我が子に対して抱く深い愛情である。三田谷啓による母性愛をめぐる講演においては、「母たるも

の責任、母の重大なる職務の自覚、重要性」、さらには母の責務を果たすための具体例について述べていた。それゆえに多くの人々の共感を得たのである¹⁴⁾。

子育ては母親のみの責任ではなく、父親との共同作業であることはいうまでもない。「子のための展覧会」の項目に家庭や夫婦、父・母、親の項目があったことは注目に値する。横山¹⁵⁾は『子育ての育児史』において、「育児書の若干のテーマとして‘父親’が登場するのは大正期であり、そしてもう少し大きく父親の姿が現われるのは、後の高度成長期(1960年代)以降である。いずれも市民的家庭中心傾向の中からのものであった」と述べている。

現在、子育てをめぐる問題が顕在化し、子育てへの父親参加の必要性が主張され、「母性」とともに「父性」の育成が求められている。白井¹³⁾は「父性とは男性がもつ自分の子どもに対する愛情と、子どもに対する保護・養育の責任と義務に裏付けられたものである」と述べている。さらに白井は次世代を担う子どもが健全に出生し成長するには、健全な母性・父性を育むことが必要であり、そのためには親の教育が必要であると主張している。

昭和初期の三田谷治療教育院が実践した子育てや母性教育に関する展覧会は、乳・幼児期から生殖世代を視野にいられた内容であった。それは現在の成育医療におけるライフサイクルの視点に通じるものである。

子育てをめぐる問題解決のひとつとして、育児支援のみならず母性・父性教育が必要である。すなわち青年男女を対象として親になる前の準備教育が必要である。また、育児啓蒙活動としての展覧会は母の会や婦人会、あるいは学校が主催し、百貨店、小学校・女学校で開催されるなど、地域に根付いた活動であった。それは現在の地域における育児支援活動のあり方への一つの示唆になると思われる。

V. まとめ

子どもの健やかな成長のためには、親になる以前からの父性・母性教育が重要であるとともに、保健・医療・教育・福祉の連携のもとに地域ぐるみの育児支援が必要である。現在、子育てに関する情報が氾濫しているが、内容が吟味され、心身ともに健全な育成が可能となるような情報提供とは何かを関係者の十分な連携のもとに検討する必要がある。

謝辞 貴重な資料を提供して下さいました三田谷治療教育院前理事長故飯島十郎先生、現三田谷学園長 堺孰先生に厚くお礼申し上げます。さらにご指導賜りました長崎純心大学教授津曲裕次先生に深く感謝いたします。

なお本論文の要旨は第48回日本小児保健学会(横浜市 2001年)において報告した。

■文 献

- 1) 柳沢正義：成育医療の概念とその背景，小児看護，25(2)，1567-1570，2002.
- 2) 駒松仁子：昭和初期の一虚弱児施設，三田谷治療教育院の‘治療教育’について，子どもの心とからだ，6(2)，95-102，1998.
- 3) 的場循治編：社会福祉法人三田谷治療教育院創立三十年記念集，14-18，三田谷治療教育院，1956.
- 4) 田中聡：衛生展覧会の欲望，青弓社，1994.
- 5) 同上書：130
- 6) 同上書：221
- 7) 三田谷啓：児童相談の現状と将来，日本児童協会時報，6(5)，2-9，1925.
- 8) 毛利子来：現代日本小児保健の歴史，116，ドメス出版，1975.
- 9) 同上書，161.
- 10) 小林輝行：昭和戦前期の家庭教育論に関する一考察，信州大学教育学部紀要，51，37-45，1985.
- 11) 村田晶子：戦時期の母と子の関係，赤沢史郎，北河賢三編，文化とファシズム，333，日本経済評論社，2001.
- 12) 同上書：332.
- 13) 臼井雅美：母性・父性とは，小児看護，25(2)，1636-1642，2002.
- 14) 駒松仁子：シリーズ福祉に生きる 40 三田谷啓，大空社，127-140，2001.
- 15) 横山浩司：子育ての社会史，230，勁草書房，1987.

【要旨】 現在，母親の育児不安，児童虐待の増加などが問題になっているが，昭和戦前においても育児をめぐるさまざまな問題があり，それへの対応がなされていた。

そのひとつに，現在，知的障害児・者施設である社会福祉法人三田谷治療教育院を1927(昭和2)年に設立した医師の三田谷啓の活動がある。本報告の目的は，昭和初期の三田谷治療教育院が実践した展覧会の内容をつまびらかにして，現在の育児支援や母性教育に役立てることである。方法は文献研究で，三田谷治療教育院所蔵の史・資料および「展覧会に関する記録」を対象とした。展覧会は1928(昭和3)～1939(昭和14)年の期間に117件開催されていた。分析した結果，次のように時期区分できた。I期は1928(昭和3)～1932(昭和7)年で，母性教育を中心とした啓蒙活動の時期であった。主催者は母の会が最も多く，次いで地方自治体，婦人会などであった。開催場所は百貨店が最も多かった。開催地域は京阪神を中心に中国・四国地方に及んでいた。II期は1933(昭和8)～1939(昭和14)年で，子育てと母性愛を中心とした啓蒙活動の時期であった。主催者は愛国婦人会や母の会の順に多かった。開催場所は百貨店が最も多かった。開催場所はI期の地域に加え東海北陸・九州地方にまで及んでいた。昭和初期は健民政策のもとに，虚弱児等の健康問題が顕在化した。三田谷治療教育院は母子に関する医学的知識や最新の情報を提供する発信基地の役割を果たしていた。母性教育や子育てに関する展覧会は，現在にも通じる内容であり，現在の母子保健に関する問題解決への示唆が得られた。より健全な子育てには父性・母性の育成が不可欠であり，青年期男女を対象とした親になるための準備教育が必要である。
